

コラム



温泉は

冬になると温泉が恋しくなるのは歳のせいであろうか？日本列島は世界でも指折りの温泉地だ。昔からの温泉はもちろんのこと、現在では掘削技術が発達し、都市部でも“こほれワンワン”状態で温泉が掘り当てられている。平成20年度現在、東京都内には216もの温泉があり、そのうち都区部に77もの温泉が存在している。遠出しなければ温泉に浸かれなかった時代がまるで嘘のような状況にある。組合関係でも温泉に行かれる方は多いであろう。

日本の温泉の歴史を遡ると、現在のような湯に浸かるタイプの温泉が一般化した歴史は比較的浅いようなのだが、それでも多くの温泉は江戸時代前後から続いてきている。温泉は江戸や大坂といった都市部にはほとんどなく、徒歩で何日もかけて出かけなければ辿り着かないようなところにあるのが常であった。温泉にはそれぞれ薬効があり、切り傷に効く、皮膚病に効く、腰の痛みにも効く…と症状ごとに区分がなされ、人々はお目当ての薬効を求めて温泉に出かけていたようだ。

また、温泉の近くにはお寺などがあることが多いようだが、温泉は治療場、つまり治療の場でもあり、人の生き死に関わる場でもあったことが温泉と神社仏閣との関係性を強めてきたようでもある。現在のような医療が一般化する前は、温泉は最後の頼みの綱でもあったという。〇〇温泉に行けば助かるという便りを伝に弱った体に鞭打ちながら温泉に向かい、願い叶わず力尽きていった人も少くな

いという。温泉寺には途中で力尽きていった人々も埋葬されているという。温泉は、現在では気軽に出かけられるところであるが、時代を遡ればかなり重たい場所でもあったこと、最後の希望の場所でもあったことを覚えておきたいところだ。

その温泉で重要視されてきたのは言うまでもなく泉質だ。薬効を示す泉質をいかに保ちながら湯船を作るかに人々は長い間苦心してきた。

だが、そうした泉質への想いは最近はずっかり薄れてしまっているようなのだ…。

温泉宿は泉質よりも見栄えや豪華さが重視されるようになり、泉質の維持は次第に忘れられる傾向が強くなってきている。大きなホテルの最上階等には巨大プールのようなカギ括弧つきの「温泉」がつくられ、バブル期には大勢の人々が押し寄せたことは記憶に新しい。だが、考えて見ればすぐ分かることだが、いくら日本が世界有数の温泉地帯とはいえ、プールのような巨大な湯船を満たすほどの温泉が湧き出ているところは数が限られている。大概の温泉は5メートルほどの湯船にお湯を満たすのがやっとといったところだ。本当は小さな温泉であっても巨大化の波に流され、大きな「温泉」に作り変えられた結果として、水道水で加水したり、濾過器で循環したり、塩素殺菌したり、ボイラーであたため直したりと、元々の温泉とは泉質が異なる「温泉」が増えているのだ。娯楽としての「温泉」はそれでも良いということなのかも知れ

最後の希望

杜 海樹

ないが、温泉本来の持ち味までが薄められては果たしてどうなのであるだろうか。

温泉の泉質については、温泉法で定められてはいるが、その条文内容は「『温泉』とは、地中からゆう出する温水、鉱水及び水蒸気その他のガスで、別表に掲げる温度又は物質を有するものをいう」であり、別表には「温度(温泉源から採取されるとき温度とする)摂氏25度以上、物質(いづれかひとつ)、含有量(1キログラム中) 溶存物質総量 1,000 ミリグラム以上、遊離炭酸 250 ミリグラム以上〜」とある。つまり、25度以上で何らかの成分が1つでも確認できれば温泉と名乗れるというわけなのだ。どこにいても温泉がある理由がそろそろお解りいただけたであろうか。

こうした事態を受け、2005年には温泉法施行規則が改正され、温泉利用施設においては、温泉に加水、加温、循環装置の使用、入浴剤添加、消毒処理などを行っている場合は、その旨とその理由の掲示が義務づけられることとなった。しかし、どのくらい加水しているのかの加水率表示は義務づけられなかったため、逆にどんなに水道水を加水していても温泉であるという逆転のお墨付きがつく事態となってしまう、極端な話し、温泉1滴を水道水で全て薄めても正々堂々と温泉と名乗れることになってしまっている。どのホテルの温泉が本物か、それとも「温泉」なのかは、温泉の管理者に尋ねるか、調査するかしかない。かつて、温泉で最後の希望をかけていた

人々がこうした話を聞いたならば、さぞがっかりされるのではないだろうか。

さて、温泉について、筆者自身は極力、自噴泉・露天・混浴・共同管理のところを選んで利用している。足下から湯が湧き出るような自噴泉は、山の崖の途中や河原といった比較的危険を伴う場所にある場合が多いので、建物は建てられず露天であり、湯元を二つに分割できないので混浴であり、私有財産ではなく皆のものとしてあるので共同管理である場合が非常に多いからだ。数は少なくなったが、足で探せば、かつての温泉同様の正真正銘の温泉に浸かることはまだまだできる。加水の全くされていない源泉の良さは浸かってみないと分からないが、大変心地が良いものだ。加水温泉とは明らかに皮膚感覚も違う。大自然の中の温泉にゆったりと浸かっていると本当に生きる希望まで湧いてくるから不思議というものだ。

何かと嫌な事の多い現代社会だが、最後の頼み、生きる希望は時代が変わってもやはり温泉場にあるのかも知れない。考えに行き詰まった時は、ゆっくりと温泉に浸かれば名案が浮かんでくるかも知れない。ただし、温泉に浸かる時は、本物の温泉に限ると思うが。

また、逆に言うと、最後の希望というものは本物の中からは出てこないということなのかも知れない。

